

## 米芾書史所載法書考

中 田 勇 次 郎

宋の米芾の書史および宝章待訪録、宝晋英光集に所載する法書について、前号ならびに前々号において、二王の部を収めたが、本号では、魏晋から宋齊梁、さらに隋の智永、唐太宗、虞世南の部についての解釈ならびに考証を記した。例によって、書史所載の文を主とし、書史になくして待訪録、英光集にあるものは、その出典を付記して加えることとした。

### 晋 賢 十 四 帖

晋賢十四帖は檢校太師の李瑋が侍中の王貽永の家から買い求めたものである。第一帖は張華の真楷で、鍾法（魏の鍾繇の書法）で書かれている。次は王濬、次は王戎、次は陸機、次は郗鑒、次は陸疏、（統）、表晋元帝批答、次は謝安、次は王衍、次は右軍（王羲之）、次は謝方の兩帖、次は王珣、次は臣詹、晋武帝の批答、次は謝方回、次は郗愔、次は謝尚である。このうち、謝安帖には「開元」両小璽を紙縫に印し、建中の「翰林（之）印」をもちいている。謝安と謝万帖には、唐の王涯の「永存珍秘」の印がある。大巻の前に「梁秀収闕古書（記）」の印がある。のちに「殷浩」の印がある。「殷浩」は丹をもちい、梁秀は赭色を用いている。この人は（殷浩と梁秀）は唐末の賞鑒の家である。その間に太平公主の胡書印、および王溥の印がある。五代にわたり宰相を出した家に宝蔵されているものである。侍中（王貽永）というのは国塔（天子の娘むこ）の丞相の子である。

注、李瑋は、一に李焯に作る。字は公焯。仁宗の女、兗国公主を尚した。駙馬都尉となり、建武郡節度使の官に至った。水墨竹石を善くし、章草、飛白の書にもたくみで、賦詩をも好んだ。書画の収蔵も多く、米芾はこの邸にて書画の鑑賞をしている。宋史卷四六四に伝記がある。王貽永は、字は季長、太宗の女、鄭国公主を尚した。駙馬都尉から尚書右僕射、檢校太師、兼侍中の官に至り、外戚の政治家として

名をなした。宋史卷四六四に伝記がある。晋賢十四帖というが、書史の記載するところは十五家あり、一人一帖とすれば一致しない。宝章待訪録には次のような記載がある。

晋武帝、王渾、王戎、王衍、郗愔、陸統、桓温、陸雲、謝安、謝万等十四帖。

右、真蹟は駙馬都尉の李公炤の第宅にある。王戎の書字には、篆籀の氣象があり、奇古であり、墨色は漆のようで、紙はみな磨破すりまれている。上に「開元」二字の小印があり、太平公主の胡書印がある。まことにすばらしいもので、そのすばらしさは口では述べることができない。世上にはめずらしい書蹟である。王涯の「永存珍秘」の印、「殷浩」の印、「梁秀收閱古書記」の字の印がある。十四帖中の郗愔の一帖は、閣本の法帖に載せられているものである。むかし、王著が王溥の家の書蹟を取って、秘閣にある書蹟と雑まぜて模出し、この十四帖の巻中からただ郗愔の二行だけを模して、そのほかのものは棄てて取らなかつた。悲しむべきことである。謝安の慰問帖は、書が清古であつて、二王の上にある。謝安がかつて王献之の帖の末尾に批語を書きそえたというのも、なるほどもっともなことである、という。

待訪録では十四帖の数や、所蔵者や印記などは書史の記事と同じであるが、十四帖の内容に、晋武帝、王渾、桓温、陸雲の四家が多い。この帖数の差がどうしてあるのか不明である。

英光集巻七には、また晋賢十三帖を記載している。それによると、

右は本朝（宋）の参知政事の蘇太簡（易簡）所蔵したところのもの。丙寅の歳、集賢閣老（蘇耆）の孫にあたる、秘閣子美（蘇舜欽）の子、志東（蘇激）から手に入れた。（蘇耆―舜欽―激）。志東は好事の士で、私とは親しく書画によって交際する家柄である。この帖の上には、「邳公之後」、「四代相印」、「蘇氏」の字の印を用いている。太簡は宋太宗の知遇を被り、諸国に使して、書画の収集にあたること三度に及び、書画を賜与されることはたいそう多かつた。公卿の家ではその収蔵の右に出るものはなく、とりわけ名が著わられていた。紹聖年間、この帖を重ねて表装した。翰林の蔡元長がすでに跋を書いていた。そして、当時の「翰林之印」を押していた。副車（官名）の王晋卿（王詵）が借りて行って、元長の跋を剪りとり、他の書の軸をくつつけて、返還した。その上には故の印がまだのこつていた。元符元年、漣漪の瑞墨堂で題す、という。

この晋賢十三帖は、もと蘇易簡の所蔵していたものを、その子孫の蘇激（志東）から手に入れたので、内容は記していないが、所蔵の系

統もことなり、前記の十四帖とはまた別の晋帖と見なければならぬ。

羣玉堂帖の残帖に米芾の好事家帖がある。その文に、

「好事家の收藏するところの帖に、篆籀のような書体のものがある。二王を廻視するに、(二王に比べてみると二王の書には)頓に隳意がある。晋人の書一帖がこれである。謝奕の混然天成したもの、謝安の清邁なものがそれで、まことに謝安が子敬帖の末尾に批をかきつけたのももつともである。この晋人帖の首尾には印記が多い。敝筭に收藏するところのものと同様である。君倩、唐氏、陳氏のたぐい(君倩は押署であらう、唐氏陳氏は印記であらう)、玉軸で古錦の表装はみな古いものである。まことに世にもまれなめずらしい品であり、言葉ではのべつくされない。一緒に鑑賞することができなかったのは残念である。さっそく家に帰って数十幅を追写したが、古人の筆跡はまねられそうもない。笑うべし、笑うべし」。

晋人書一帖として、謝奕、謝安の帖をかかっている。この帖は李瑋の晋人十四帖ではないか。謝奕の名は、晋人十四帖に見えないが、一人一帖とすると内容が収容しきれないほど多くなるので、書史の十五家のほかにもまだ晋人の書が含まれていて、一帖のうちに何人かの帖があったとすれば一応の解釈はつく。謝奕もこの中に入ることになる。

また、こういう。

「陸琬、字は士瑤。或いは陸統と云う。一字がこのようになっていいるのがある。よくわからない。原注に統は一に玩に作る」と。

陸琬は書史の晋人十四帖中に見える人物である。この条も晋人十四帖について言っているものと見るべきである。

また、次のように言う。

「武帝の書は、紙が糜潰ただれているが墨の色は新しく書いたようであり、墨のあるところは破れていない。このような書は臨学して及ぶものであるうか。人に筆硯を棄て臨学を断念させようとするものである。古人はこのような書を得て臨学すれば、どうして妙境に至らないはずがあるうか。ただ、唐人の筆札を写すときは、意格が尪弱(尪、羸弱の意よわわしく)、勝れる道理があるはずはない。この武帝の書には、その気象に、太古の人のように淳野な性質がある。とうてい張長史(旭)や懷素などのその藩籬に到ることができないものではない。むかし帰公が趙令時の古帖に跋をして、これを手に入れようとした。ときに一盒はこの書をことごとく出して、十二帖と交換しようとしたが、許

されなかった。今日はもう篋を開くのもものうい。ただ一日中、墨を磨りながら、十二字を追想してみずからを慰めているにすぎない」という。

この武帝は晋賢十四帖中の晋武帝をいうであろう。

米芾の李太師帖にも、

「李太師叔晋賢十四帖。武帝、王戎書若篆籀。謝安格在子敬上。真宜批帖尾也」

とあって、ここにも晋賢十四帖として、武帝と王戎、謝安の書を論じている。これによってやはり晋賢十四帖というもののあったことがたしかめられ、武帝、王戎、謝安などの書が含まれていたこともわかる。武帝は臣詹の書の批答にも書が見られるが、別に武帝の帖があったと解すべきであろう。書史の十五家のうちには、晋武帝として独立した帖は記されていない。

書史の記事は十四帖中のすべての内容を記したのではないと考えるほかはない。

謝安帖の米芾の跋には、晋（賢）十三帖とあり、十四帖としていない。その内容は、郝愔帖のほかに王戎、陸雲、晋武帝、王衍、謝安、謝万、計十二帖という。これでは一帖少なくなっている。ともに米芾の記したものであり、何か別の数え方か思いちがいかと解せられる。

なお、晋賢十四帖中の謝安帖は、八月五日帖のことで、米芾は建中靖国元年に、蔡京からこの帖を入手している。宋拓宝晋斋法帖にこの帖の米芾の刻本が載せられている。詳細は小著、宋拓宝晋斋法帖鑑賞記に述べておいた。

謝安帖とつづいて陸機の平復帖があったことを張丑の真蹟日録二集の真晋斋記に記している。これに誤りがなければ、晋賢十四帖の陸機は平復帖をさすことになる。

謝安帖には唐模本と思われるものが現存している。この本は写真で一見したことがある。

郝愔廿四日帖

晋賢十四帖中にある。今、淳化閣帖中に刻されている。草書二行。

謝安帖

また、晋の謝奕、桓温、謝安三帖を一巻としている。上に「寶蒙審定」の印がある。謝安帖はのちの人が濃墨で模搨した。それですっかり墨

がにじみこんでしまった。この帖はのちに副車の王詵に帰した。一卷を三帖に分つたのは失敗であったという。謝安帖は墨で上から塗りかけた。唐人はこの帖を大切にしたりつもりであろうが、かえってこれを害することとなった。後世の人はこれを戒しめとしなければならない。李瑋は、この帖も王氏（貽永）から買ったという。

注 「寶蒙審定」の印は、歴代名画記の古今公私印記に見える。

待訪録には、「晋謝奕、謝安、桓温三帖、右真跡、麻紙書。李公昭（璋）の家にある。上に鍾紹京の「書印」と「寶蒙審定」字の印がおされている。謝安帖は、後世の人が、墨色の淡いのをおそれて、ふたたび濃墨を用いて填めた、まことに歎かわしいことである。前巻とともに、みな絹帖があつて、爵号を書いているのは、おのずから名筆である」という。

鍾紹京の「書印」は古今公私印記に見える。この三帖は晋賢十四帖とはまた別のものであり、李瑋の所蔵していた晋賢帖が一つではなかったことがわかる。

#### 庾翼 稚恭 真蹟

晋の庾翼（稚恭）の真蹟は、丞相の張齊賢の孫の張直清（汝欽）の家にある。古黄麻紙にかかれ、全幅に端末がない。（紙のつぎ目のないことか）。筆勢は細弱で、文字は相連属して古雅である。内容は兵事を論じて道理がたっている。「翼」の字の上に「寶蒙審定」の印がある。のちに張芝、王廙の草帖をつらねている。これは唐人の偽作であつて、紙を薰<sup>くす</sup>べて、上層はふかく濃く、下層は淡くし、筆勢はたいそう俗っぽく、ことばにも倫<sup>く</sup>べようがなく、最上の宝物を瓦礫<sup>がらくた</sup>に雑<sup>まじ</sup>せているのは、なげかわしいことである。余はたびたび汝欽（直清）と語つたことがあるが、この帖の真偽については弁別しようとはしないのである。

注 張齊賢、字は師亮、謚文定。宋史卷二六五に伝記がある。その子直清、汝欽はその字であろう。待訪録には、「庾翼帖、全幅、上に「寶蒙審定」の印がある」という。また次に「張芝、王翼（廙の誤であろう）二帖は真ではない」という。

#### 王惔真草帖 待訪録

晋の王惔の真草帖、晋の張翼帖、宋の阮研帖、宋の蕭思話表文帝批答。右は駙馬都尉李瑋のところにある。私はあわせてこの石本（拓本）を見たことがある。のち、李に遇つたときには、高橋の楊氏にあると言つていた。ただし、まだ見ることができない。

中貴の高樓の楊氏が教帖を收藏している。蕭思話の表はその一つである。思話の字には鍾繇の書法があるが、これにはない。(宋)武帝批答(蕭思話帖ののちにある)四字を見るに、君臣の筆気は同一である。紙は古くて後は破れ、前の部分は完全である。これは唐人の書いたものであるが、なかなかの佳作で、今の人にはまねすることができない。

また、王珣の書の真草は真蹟である。これには鍾(繇)張(芝)の法がある。

張翼は宋翼に作るべきである。魏時代の人である。真蹟ではない。

注、待訪録に、晋王憚真草帖、晋張翼帖云々とある記事の、張翼帖についての訂正である。書史には待訪録のこの文があったのではない。か。張翼は宋翼の誤りとする。

宋翼は三国魏人。鍾繇の弟子。筆陳図題後に、宋翼は先來、書がまづかったが、のち、筆勢論を手に入れてこれを読み、この法に依って書を学んで、名が大いに振った、という。

#### 阮 研 草 帖

また、阮研の草帖は奇古である。偽物ではない。また一帖、竹片書(竹片で書いた書の意であろう)もまた好事者のつくったもので、古い印記や跋の考証すべきものも加えられていない。

#### 六朝古賢の書一帖

懷素の絹帖一軸。内容は故事を雑論したものである。後人が二十余りばらばらに剪りはなしてしまった。王詵が多年にわたってこれをさがし求めて、もとの数に足そうとしている。

また一帖に「史陵者」というのがある。絹帖である。私は六朝古賢の書一帖と交換して、王詵に与えた。

#### 七 賢 帖

劉涇が莫州において作(通判)であったとき、侍中の王貽永の孫が、その地方の太守をしていた。劉涇がここで摹帖一卷を(王貽永の孫から)

手に入れた。これは胄曹參軍李懷琳の偽作した七賢帖であって、後人の撰んだものである。そのうちの搏赤猿帖に、

「僕不<sub>レ</sub>想、歛爾夢<sub>レ</sub>搏<sub>レ</sub>赤猿<sub>一</sub>。其力甚<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>號虎<sub>一</sub>。良久反覆。余乃觀<sub>レ</sub>天背<sub>レ</sub>地。視<sub>レ</sub>穹、亦当<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爽。但僕之不<sub>レ</sub>達。安得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>憂。古乎。報<sub>ニ</sub>我凶<sub>一</sub>乎。詳告。三日。阮籍白。」

とある。

君のこの帖によるに、今の刻石の七賢帖に比べて、文字の数が多し。これは李懷琳の撰したところのことばである。そして、法書要録に（述書賦注下）載せるところの七賢帖は、唐太宗がその偽蹟であることを知りながら、愛玩したものである。「貞觀」の文字の印をおして、御府に收藏されたものである。

注 述書賦注に、

李懷琳は洛陽の人である。国初のとき（唐のはじめ）好んで偽迹をつくった。そのつくった大急就（大草の意であろう）は王書及び七賢書と称している。仮りて薛道衡の作と云っている。叙及び竹林叙事はならびに衛夫人の書で、咄々として人に逼る。嵇康の絶交書は並びに懷琳の偽跡である。

姓は謝、名は道士というものがあつた。罽紙を造るのが上手であつた。大急就両本各十紙を書した。言詞は鄙下で、跋尾は分明である。

徐唐沈范（六朝の四名家であろう）の縦跡は炬赫として名高い。装背を<sup>くたひれ</sup>勞<sub>レ</sub>拈<sub>レ</sub>せて、これを持って錢に質した。貞觀年中、勅により、しきりに彼の錢主を捜し尋ねて、封して以つて闕下に詣つた。太宗は殊のほか喜んで、縑二百疋を賜つた。懷琳はそこで別本をたてまつた。因つて待詔文林館の官を得た。故に、宮内にある本には「貞觀」の印がある。頃年は右相林甫（李林甫）の家にあつた。後、本は張懷瓘のところであり、尋いで轉じて李起居に与えられた。

また、李氏衛帖がある。その帖に、

「衛稽首和南。近奉<sub>レ</sub>勅寫<sub>ニ</sub>急就章<sub>一</sub>。遂不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>與<sub>ニ</sub>師書<sub>一</sub>耳。但衛不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>技賞<sub>一</sub>。随<sub>ニ</sub>世所<sub>レ</sub>學。規<sub>ニ</sub>摹鍾繇<sub>一</sub>。遂多歴。年二十著<sub>ニ</sub>詩論<sub>一</sub>。草隸通解。不<sub>ニ</sub>敢上呈<sub>一</sub>。衛有<sub>ニ</sub>一弟子王逸少<sub>一</sub>。甚能學<sub>ニ</sub>衛真書<sub>一</sub>。咄々逼人。筆勢洞精。字体遒媚。師可<sub>レ</sub>詣<sub>ニ</sub>晋尚書館<sub>一</sub>書<sub>レ</sub>耳。仰憑<sub>ニ</sub>至鑿<sub>一</sub>。大不<sub>レ</sub>可言。弟子李氏衛和南」。という。

この帖は今の閣帖に比べて字数が多い。これもまたかれ（李懷琳）の撰したものである。

注 淳化閣帖卷五には、但衛の下に「不能拔賞」四字がない。又、閣帖には「遂多歴」を「遂歴多載」に作る。

次に無名帖、次に郝超帖、これも閣帖中に摹刻されている。次に陸機、衛恒帖。衛（恒）もまた閣帖に摹入されている。のち、余は劉涇にゆずり画と交換した。前の四帖を分けて、李錞に与えた。みな貞觀年間の一種の偽好のものである。

注 閣帖に郝超の遠近無多説帖があり、米は李懷琳の偽作とする。衛恒には一日帖があり、同様に偽帖とする。

#### 魏晉古帖數十軸

管軍の苗履の長男で、その名を忘れたが、癸未の歳（一一三崇寧二年）都下の法雲寺で解后（めぐりあつ）た。

長安の一大姓の村居の家に、石画の中に所蔵するところの玉軸の、晉魏古帖數十軸を、目のあたり実見したことがある（と長男が言っていた）。余はいつもこの帖のことを夢想していた。洛陽に書画の友人があるのにたのむでいるが、いつも約束しながら借り出すことができず、めいめい訪ねては古帖を鑑賞していた。宋子房の言うところによると、その人（長安一大姓の人）はしばしば王詵とともに、尋ねもとめて書蹟を購っていたという。

余はかつてこれを見て太尉（郝鑿）の書とした。駟、平生、洛、蘇の一官吏に任せられて書画を購んと思っていたが、それも得られないままに、今は年をとり、目もわるくなったので、十分くわしい鑑定はできない。

注 宋子房は前出。洛陽にある書画の友人であろう。太尉は晋の郝鑿らしく、これが晋魏古帖の一つであろうが、その間前後の事情はこの記事では不明瞭である。駟は悪賢い仲買人ということば。あるいは宋子房をいうか。

#### 米臨二十余帖

余は蘇州に居り、葛藻と住居が近くであった。葛氏は、私の学臨帖を見るたびにもらって行った。ついにこれを集めて二十余帖に表装した。歴代名画記に載っている印記に倣って印記をつくり、これを押し、一軸に装背した。ある日、これを出して示したので、思わず大笑した。葛氏は江都の陳叟と仲がよいので、これをかれに贈った。陳叟はこれを真物と思っていた。余は借りて戻そうとはしなかった。今、黄材の家にある。

注 陳叟は陳堯叟か、宋史二八四。未詳。

跋義献帖 宝晋英光集七

柳誠懸（公權）が大令（王献之）の書（送梨帖）を手に入れた。唐太宗の書が、その巻首において、大令の書ののちに連なっている。（送梨帖、言叙帖、太宗書の順序に一巻になっっている）。また右軍（王羲之）の両行（言叙帖をいう）を手に入れて、かえって、又一帖といっているのは、羲之の書を誤って献之の書としたからである。また、かれがかつて馮当世（馮京）の西昇経に跋をしたのを見たことがある。これには褚遂良の書としてゐるが、実は閻（立本をいう、西昇経図をえがいている）、褚（遂良）ではないのである。書を能くするものが、かならずしも弁別をよくするとは限らない。これはちようど、欧陽詢、虞世南は唐代において書名は天下に聞えたが、書の鑑識には適しなかつたし、魏鄭公（徵）は書名はなかつたが、やはり同様に鑑識には適しなかつたのとおなじである。褚遂良は貞観の内府に收藏されているものは、後世はこれを偽物がないとしている、有識者はこれを鑒（模範）としている。癸未、玉堂竹斎、太常博士米芾記す、とある。

跋唐模帖 宝晋英光集七

開元（玄宗）の御府、大中（宣宗）、建中（徳宗）の弘文館にはみな法書の搨本を收藏している。黄金白玉はこの上もない宝器ではあるが、毀れてももう一度作るには、何れの時代でも職人がないことはない。ただ、書は、下筆はみずからするけれども、もう一度書いてももともとどおりのもものは得られない。よって摹搨してこれを所蔵するに、何の陋（見苦しい）ことがあるか。第一帖、右軍の書。閣帖には有るが及謝侯の字がない。第二帖及末の桓温帖は、世上に別本があることを知らぬ。漣漪郡嘉瑞堂元章記す。

錦織 成 諸 仏

朱長文が錦の織成の諸仏を收藏している。巾四尺、長さ五六尺。上に織成の牌子（題簽）があり「晋永和年道」とある。私の家の一古書囊の、織成の山水神仙の錦と同じである。雲鳳山禽猿鹿はまるで画のようである。

注 朱長文は字は伯原、呉郡の人。墨池編の著者。米芾に楽圃先生墓表がある。元符三年（一一〇〇）に没した。

晋葛玄飛白天台字 待訪録

右、石本を見る。真蹟は台州に在ると聞く。

注 葛玄、字は孝先、三国呉の人、号は葛仙公、長生不死の道を慕い天台の赤城に入った。

米芾書史所載法書考

宋羊欣、宋翼二帖并褚令模蘭亭 待訪録

右、中書舎人の蘇軾の云うところでは、故相王隨の孫景昌のところにある。撫石は湖州墨妙亭にある。しばしば石本を見る。今、沈存中括の家にある。

注 王隨、字は子正。仁宗の時、門下侍郎、同中書門下平章事を拝した。諡は文惠。宋史卷三一一に伝記がある。墨妙亭は宋の孫覺（辛老）が湖州に、漢以来の古文遺刻を蒐集したところ。沈括、字は存中、夢溪筆談の著者。

梁 蕭子雲

史孝山出師頌 蕭子雲

錢鏐の房下に史孝山の「出師頌」がある。蕭子雲と題している。これもまた奇古である。

注 史孝山は史岑、後漢人、文選四七に史孝山出師頌がある。

智 永

歸田賦

陳僧智永の真草書歸田賦は、襄陽の魏泰のところにある。のちに一跋が題されていて、「開成某年、白馬寺臨一過潭記」とある。白麻紙に書かれている。世上の人が智永の書を收藏しているが、このような真物を見たことがない。虞世南はこの書から出たものである。魏泰が誤って虞世南の書と言っただけである。

注、待訪録に、陳僧智永真草書歸田賦、右真蹟、襄陽魏泰のところにある。ゆえに南昌の人が、装題して虞世南と曰ったのである。白麻紙で、古跋があり「開成五年白馬寺臨一過潭記」とある。私は潭に官し、泰は湖外に遊び、これを携行して賞跋して日を累ねた、とある。

魏泰は宋人軼事彙編に見える。墨莊漫録に、字は道輔、号臨漢隱居。著に東軒雜録、臨漢隱居詩話等の書がある。王安石との交遊があった人物。

宝真齋法書替卷四に、歸田賦、「遊都邑以永久……焉知榮辱之所如」、右、陳僧智永の真草歸田賦真蹟一卷。按ずるに張懷瓘書斷に、永の書は妙品中にあり、「真は、佩玉端委、朝に立つ如く、草は擊壤謳歌、聖を樂しむ」ごとし。体は同じではないが、その致は一つであ

る。この書はもと襄陽の魏泰の家にあった。ゆえに南昌の人（有故は故有の誤りならん）が装題して「虞世南」と云った。古跋があり、「開成五年、白馬寺臨一過潭記」とある。この跋は今も存していない。この書についての詳しい由来は米芾の書史のなかに伝えられている。中興より以後（南宋高宗以後）、書は八九禁。憲聖慈烈皇后が、かつて暇日をもって、御みずから翰墨の臨摹をなされた。今、秘省の群玉堂第一巻中にある。体裁は真物とまがうばかり、いささかも異なるところがない。璽刻（璽印）は思陵（宋高宗）の收藏であったことを表わし、紙縫には蘇太簡家、国老印、（太簡は蘇易簡、国老は蘇耆）「四代相印」「武功凶書審定真蹟」印があり、ならびに半印すべて十三がある。また、淳化のとき、太宗から賜ったもので、これらの諸印によって考証することができる。蘇氏の家に九代流伝し、両朝に著定（鑑定）され、聖天子の鑒賞と賢臣の題記がそなわる。このほかには述べることもない。嘉定乙亥十月、之を呉韜仲綱から手に入れた、という。書史では魏泰が誤って虞世南書と題したというが、待訪録では南昌（江西）人が題したとする。法書賛も南昌人としている。魏泰と南昌人が同一人となるかどうか明らかではない。

白馬寺は河南省洛陽渠東にあり、漢明帝のとき、西域から摩騰、竺法蘭が来て創建した仏寺。開成某年は待訪録に五年とあり、唐文宗（八四〇）朝にあたる。

今、余清齋帖に智永の帰田賦、五十五字があるが、文は断絶し、全文ではなく、書体は楷書だけで、真草書ではなく書史や宝真齋待訪録のものとは同じでなく、後人の偽託の筆と見るよりほかはない。

智 永 千 文

唐、粉蠟紙の搨書。うち一幅は麻紙で、この部分はこれは智永の真跡である。最後の一幅上に、雙鉤で摹した文字がある。帰田賦と同じ意味である。想像するに、真跡一卷、そのうち、一幅の真跡が中にあるというので、搨して数十軸とした。もし、末尾に双鉤填墨が一字なかったならば、この巻全体の真蹟かどうかという弁別はむづかしかかったとおもう。これは賈安公（昌朝）のもので、潤筆として王荆公（王安石）に贈った。その弟の王安国がこれを手に入れた。今、葉洵の家にある。葉は安国の婿である。古跋がついていて「契闊艱難。不敢失墜」とある。この跋の書は歐陽詢の行体を学んでいる。

注 賈昌朝、字は子明、慶曆中、同中書門下平章事を拝した。謚は文元。宋史卷二八五に伝記がある。（九九八一—〇六五）。

米芾書史所載法書考

待訪録に、

右、唐、粉蠟紙の搨書（搨摹の書）。古跋があり「契闊艱難、不敢失墜」という。まことに好事である。この帖は前国子監直講楊褒のところにあり、外舅の王安国から手に入れた。某（私）は元豊五年、金陵に立ちよったときこれを見た。このうち二真字が双鉤填墨したものであった。しかし、人々はなおまだ搨書であることを信じていない」という。

これによると王安国からさらに楊褒の手に移ったことになっている。書史では王安国から葉濤に帰したことになる、相違している。葉濤、字は致遠、宋史卷三五五に伝がある。書史では一字とあるのに、これには二真字とある。どちらかに誤りがある。

唐人臨智永千文半卷

唐人の臨した智永の千文の半卷が丞相蘇頌の家にある。

注 待訪録に、智永千文半卷、右黄麻紙、唐人臨書。刑部尚書丹陽蘇頌のところにある。

蘇頌、字は子容、丹陽の人。（一〇二〇—一一〇一）。宋史卷三四〇に伝記がある。

智 永 千 文

「送劉太冲序」は碧箋に書かれている。王欽臣の旧蔵である。後に王參政（王堯臣）の署名と印記がある。王（欽臣）は云う。「唐炯とともに二つ書を出したがために、めいめいが誤って卷子をもって帰ってしまった。唐炯は劉太冲序帖の「才不偶命而德其無鄰」の字を剪り去った。碧箋は墨色にはふさわしい。神彩が艶発し、龍蛇が生動する。これを観ると人を驚かせる。装背しないで、背紙うらひを掲めく去って、厚い紙を用いて、これを散卷する。（紙をあてて）巻く。ちょっと出すとすぐにまた巻いてしまった。その子（唐炯の子）は、「智永千文」と柳公權書「柳尊師誌」と歐陽詢の「鄱陽帖」とともに葬ったという。まことに歎思すべきことである。ある人は、この劉太冲帖はひそかに王詵に購ってゆかれたという。

注、待訪録に、柳公權書、柳尊師墓誌、右、真蹟は錢塘の唐炯のところにある、という。また、待訪録に、歐陽詢、鄱陽帖、右真蹟の模石が靈隱寺にある、という。

送劉太冲序は忠義堂帖に刻されている。「才不偶命」の才字の上に「雖」字がある。

智永 三行書

宗室の趙令穰が歐陽詢の三軸を収蔵している。第一軸は蘇彥(唐人)の語箴、次幅は故事二段。「開元」の縫印(紙縫に用いる「開元」二字の小印)、「翰林之印」と李林甫等の臣下の跋、および知書樓官名氏がある。末後に、唐の賊、蔣玄暉(朱全忠の部下)の題記、と宣徽兩院(北院と南院の二院に分つ)使印がある。余は智永三行帖、陸柬之の頭陀寺碑一幅と交換して、語箴を手に入れた。第二軸は草書五紙、第三軸は行書故事、皆、開元、姚宋印跋がある。草帖は暮年の書。精彩は人を動かす。行書は少時の書である。

注、趙令穰、字は大年。徳昭の玄孫。書画をよくしたので名高い。宋史翼卷八、皇宋書録。

蘇彥、全晋文卷一三八。

蔣玄暉(一九〇五)新唐書二二三下附姦臣柳璨伝。

智永板本千文

次に智永の板本千文を手に入れた。

智永臨王右軍五帖

智永の臨した王右軍の五帖は、呉郡において手に入れた。末帖に、

玄度忽腫。至可憂慮。疾候自恐難耶。

史籍によると、玄度は巨勝くろしほの実を服用していた。どうして亡くなったかわからない、という。この帖はかれの病気であったことを考証することができる。

そこで、薛紹彭に書簡をことずけて、考妣の会稽公、襄陽と丹陽の二太夫人の告贄(お供え)ための潤筆とした。

薛氏は書画によって交遊した。ゆくのはかならず同じところで、いつも鑒定を自慢しあったり、得失を批評しあったりした。私が漣漪にあつたとき薛君にこんな詩をよせた。

老来書興独未忘。頗得薛老同倘佯。

天下有識誰鑒定。龍宮無術療膏盲。

米芾書史所載法書考

淮風吹<sub>レ</sub>戟稀<sub>二</sub>訟牒<sub>一</sub>。 典客閉<sub>レ</sub>閣閑<sub>二</sub>壺漿<sub>一</sub>。  
吟樹對<sub>レ</sub>山風景聚。 墨池濯<sub>レ</sub>研龜魚藏。  
珠台宝氣每貫<sub>レ</sub>月。 月觀桂実時飄<sub>レ</sub>香。  
銀淮燭<sub>レ</sub>天限<sub>二</sub>織女<sub>一</sub>。 煙海括<sub>レ</sub>地生<sub>二</sub>靈光<sub>一</sub>。  
携<sub>レ</sub>兒乃是翰墨侶。 挾<sub>レ</sub>竹不<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>輿衛將<sub>一</sub>。  
氣管鈿軸映<sub>二</sub>瑞錦<sub>一</sub>。 玉麟棊几鋪<sub>二</sub>雲肪<sub>一</sub>。  
依々煙華動<sub>レ</sub>勃鬱。 矯矯龍蛇起<sub>レ</sub>混茫。  
持<sub>レ</sub>此以為風月伴。 四時之樂渠未央。  
部刺不<sub>レ</sub>糾<sub>二</sub>翰墨病<sub>一</sub>。 聖恩養在<sub>二</sub>林泉鄉<sub>一</sub>。  
風沙漲<sub>レ</sub>天烏帽客。 胡不<sub>二</sub>東來從<sub>二</sub>此荒<sub>一</sub>。

注、この王帖は右軍書録一五九にある。「未得安西問。玄度忽腫至可憂慮。得其昨書云。小差然疾候自恐難耶」とある。また、右軍書録の王本 32 a に重出している。

宝真齋法書贊卷七に、右軍安問帖、草書四行として、

「未得安西問、玄度至可憂慮。得其言云小差。然疾自恐難耳。」

とある。文はよく類似しているが、小異がある。岳珂の説明によると、

右、唐人摹、王右軍安問帖、真蹟一卷。得示帖とともに手に入れた。縫尾に御府の四印を押し、中に「蕭」字印がある。首尾には六つの半印がある。ただ米芾の印は、二字だけ弁別することができる。これは宝晋（米芾）の旧藏品である、という。

米芾のいう安西帖とはこの本のことらしい。

智永千文 唐人臨写 待訪録

右、褚氏の書、唐人の臨写。宣徳郎陳井のところにある。恭公の姪が梵夾冊に作っている。真蹟ではないが、秀潤円活で真に逼っている。今

はもうめったに手に入らない。私はまえに二度見たことがある。

注、陳并、字は巨中。宋史翼卷五、元祐党人伝に伝記がある。陳執中の孫。元祐党籍中の人であり、崇寧四年に再び承事郎、添差監連水軍塩茶酒税に降され、崇寧五年（一一〇六）宣徳郎に復した記事がある。

晩年には米芾と交遊する機会があったことが考えられる人物である。

弁才弟子草書千文

唐、弁才弟子の草書千文、黄麻紙の書。龍図閣直学士、吳郡滕元発のところにある。滕は智永の書としている。私はその前に「才」字を欠いて全く書していないのを見ていたが、もとより智永かどうかについては疑問をいだいていた。のちにまた「永」字を欠いていることに気づいて、そこで弁才の弟子の書いたものであるからこそ、祖師の二名（弁才と智永）を欠いたのであると鑑定した。

宝真齋法書替卷八

智永千文真草帖 二十八行、真草間列

周発殷湯より同気連枝に至る。

右、智永千文真草、唐人臨写真跡、臣米友仁鑒定、恭跋。

右、唐人の摹した陳僧智永の千文真蹟一卷。草字は、「周発」に始まり「毀傷」にいたる。又「之盛」より「猶子」にいたる。真字は「平章に」始まり、「毀傷」にいたる、また「之盛」より「連枝」にいたる。書体は一行ずつ交互になっている。筆の態はみな神品に入る。あたかも、鈞天万舞、広楽畢奏、干戚羽籥、各その宜しきに適し、兩階に立ち、觀聽し、自ら倦むを忘るがごとくである。惜いことにその全体を見ることができない。何延之の蘭亭記に、智永はもと右軍の七世の孫にあたり、永欣寺の閣上に住居し、臨書することおよそ三十年、真草千文をかきあげて、そのなかのよいもの八百余本を、浙江の東の諸寺にそれぞれ一本を施入した。今、有するものがあれば、なお銭數万に値する。この帖は紙墨は埴田賦とすこぶるよく似ている。まだかならずしも真蹟とは言われない。とりわけ古い印識がないので、証拠となるよりどころがない。宝晋の書史には、この千文の摹帖を三本のせている。一本は国子監直講の楊褒のところにある。それは粉蠟紙である。一本は宣徳郎の陳并のところにある。これは楮紙である。もう一本は丞相蘇公頌（蘇頌）のところにある。これは黄麻紙である。

今、この本は紙は粉蠟に類している。楊氏の本から出たものとおもう。巻前に小印があり、最後に小璽がある。慶元庚申の歳十月に、建康の士人張琨に託し、郿陽（陝西）でこれを手に入れた。

## 唐文皇手詔

余はまた、「右軍が王述に与えた書」と交換して、「唐文皇手詔」を手に入れた。これは、棗花紋の黄綾をもちいて装背うらうちしている。綾の表面には一面に花紋が浮き上っている。余はついでもた、重ねて台州産の黄巖藤紙で装背した。この紙は硬熟（十分よく硬めって）して、半分を掲めつて装背した。紙質は滑らかで淨く、軟らかく熟れ、巻いたり舒ゆるばしたりしてもすこしも毛ばだつことがない。余の家の書帖は、多くこの紙を用いて、一々自分の手で装背して、その上で笈はこに入れるようにしている。古い装背の佳くできているものは、今までは前以って掲めりあげたりはしたことはない。乾いた紙がよごれたときは（？）、表面を上に向けて、その上から一枚の新しい紙をあて、四辺に糊はを著けて、卓の上に黏はりつける。帖の上にはけっして糊をつけてはならない。新しい紙と帖の表面のあいだを空虚にしたまま紙をおさえつける。紙が乾くと、下の紙がおのずから乾いてくる。よく注意をして金漆の卓の上に紙を帖はりつけてはいけない。掲めりあげるときにかならず墨のしみがつくからである。（卓の上に墨の汚れがついていたのが、帖の紙についてよごすことであろう）。

## 虞世南

枕臥帖 十鬪九帖 前出十七帖関杞所藏本参照。

## 積時帖

虞世南書の積時帖、古い双鉤の摹本である。洛陽の李熙のところになる。李熙は李淮の孫である。紙縫に「褚氏之印」がある。余はまえに借りて摹写したことがある。

注、待訪録には、右、古、双鉤摹本。承議郎、洛陽の李熙のところにある。翰林学士、維の孫である。これにも儲氏印がある。私は借りて石に模刻したことがある、という。

## 理頭眩藥方

虞世南の理頭眩藥方の双鉤摹本は、鮑伝師の家にある。のち、俗人のために「羲之」の二字を添入され、伝えられて晋州法帖に入れて、羲之の書とされている。その聳聳さは笑うべきである。

注、晋州法帖は今、伝わるものがなく、未詳。

書 経

上虞の僧寺にある。

汝南公主銘起草

虞世南の汝南公主墓誌銘の草稿、洛陽の王護のところで摹本を見た。真迹は洛陽の好事家にあり、古跋がついているという。のち、十年たつて、真迹を見た。故の丞相張公の孫、直清のところにある。その文章のおわりは、「貞觀十年十一月丁亥朔十六日」で止っている。かたわらに小字の注記をして、「赫々高門」とあった。裴丞相の家であり、これはその銘である。しかし、この幅の文章は、中途で止っていて、行の下に空白の紙があり、なお十一字分、欠けている。これは、その卒した日を書きとめただけで、まだ葬ることを述べていないのである。このほかに欠文がまだたくさんある。どうして「赫々高門」と言うことができようか。後幅は前幅と連属しなければならぬ。その前標は紅綾で、色はま新しいもののようにあざやかである。幾玄という名をかけた題字が標の上にある。そのことばに、「故祭酒崔十八丈綽常は、冠章賀拔基とともに、みな鑒賞をもって交遊している。つねに虞世南の書を伏膺し、多く年月を歴ている。会昌年間（八四一—八四六）よりこのかた、ときにこの帖をみる。因ってその真隸をもって加筆しているのである。ちかごろ、崔文は子の兄弟の下第して東帰するのを送別するに、このたび汝南帖を見ることのできた。こんな眼福を得たことは、とても昇第に劣らない結構なことである。残念ながらその銘文（墓誌の銘文）が欠けている。咸通二年春、有神堂において、輟いで子凝に献じまことに惜しまれてならない」という。幾玄はどういう人なのかわからない。が、虞世南の法帖が、時に重んぜられるところは、このとおりである。今、好事家はその真迹を見ることがない。摹本には、枕臥、積時、蚰牙、頭風の四つの摹帖がある。一つは関中の刻石帖で、今、法帖（閣帖）に載せるところのものである。世上でもっとも少ないのは、子敬（王献之）と虞世南の法帖である。今、好事家には一字も所蔵がない。

注 待訪録に、汝南公主銘起草、右、通直郎洛陽王護のところにある。樞本を見たことがある。給事中の拳元子は云う、真蹟は洛陽の好

米芾書史所載法書考

事家にある。古跋がある。

前出、右軍帖の項に、汝南公主墓誌の米臨と刻石がある。

臨虞帖 前出、臨驚群帖に臨虞帖がある。

(未  
完)